



# 魔都上海鏡片異聞

帝都歴異妖者奇譚 其ノ四

Adult  
Only



凄く不味い。



この世界には人間以外のものが存在する。

例えば、日本の帝都。

長く時を経た食器や雑貨が魂を持ち、妖怪へと変化して、そのまま蔵に住み着いたり。

二十年を超えて生きた猫の尾が割れ、行灯の油をぺろりぺろりと舐めたり。

柳の傍らに、ぼんやりと立つ影の薄い幽霊がいたり。

極稀に、羽目を外した彼らの大集合である百鬼夜行が空を横切ったり。

それらすべて、まとめて異妖者<sup>こともの</sup>と呼ばれている。

そして、帝都だけでなく世界中に存在する。数多に――



# 魔都上海鏡片異聞

帝都歴異妖者奇譚 其ノ四



## 一、護ル者達

室温に解けた生クリームのように、とろりとろり、濃い霧が今夜も冷えた街を満たす。

ただの濃霧ならば、いつもの光景だ。

ゆったりと揺れ流れる濃霧の縁が、人の手の形となり、松明の炎にふれる。ギヤアアと激しい金切り声と共にふちんと千切れた。

切れた手は街から離れていく。死にかけの羽虫のように。ふらふらと。

一本、二本、三本、四本、五本……数え切れないくらい白い手が悲鳴を上げては飛び去っていく。

松明は一つではなかった。少し離れたところに。あちらに。こちらに。少しの距離を空け、点々と在る。どこまでも、どこまでも……

不思議な松明だった。太く平らな鉄で作られた半円の籠。大柄な男が一抱えする大きさのそれは、二メートルほどの高さに浮いている。風が吹いてもびくともしない。中で灯る火も同様。風に揺れることはなく、まっすぐ縦に燃えている。

一つ、薪の量が心許ない松明があった。

そこへガラガラと音が近づく。石畳の上を驢馬が引く馬車の車輪の音だ。荷台には薪がたつぷりと載っている。一人の男が馬車を御し、三人の男が徒歩でそばに付き従う。全員、揃いの服を纏っていた。スタンドカラーで膝丈の上衣。その上には長いインバネスのコート。どれも目が覚めるような純白で、縁を太い黒が取り巻いている。ぴったりとした白のスラックスに黒のロングブーツ。頭には黒のベレー帽。クラウンの少し下がった部分に刺繍されているのは豪華な薔薇の紋章。

様々な年齢の男達は規律の取れた足取りで霧中を進む。驢馬の隣を歩く年嵩の男が松明を指さす。若い二人の男が荷馬車の薪を両脇に抱え、松明の許へ足早に近づき、手際よく宙の鉄籠にくべていく。薪同士がぶつかったり鉄籠に当たったりする度、固い音が響いた。薪は、七度竈に入れても燃えない木——ナナカマドだからだ。今、男達にくべているナナカマドは魔術によって殊更固い。くべられた薪からパチンパチンと小さく火の爆ぜる音がすると、従属の呪痕を描く火が手を繋ぐよう螺旋を作り、ぼつと火柱をたてた。

「よし、完了だ。次へ行くぞ」



火が縦に収まったのを確認すると、一団は再び動きだした。

『核』がなくなった途端、質の悪い異妖者が侵入しだすとはな

「言うな。警備をしていた我々の失態だ」

「しかし、あの妖精王が張った結界を擦り抜ける手練れがいるとはな」

「上海の妖術師だそうさ。しかも、隷属の術でやられたとか。妖精王の怒りは、それはもう凄まじいとのことだ」

「妖精王は隷属の術を忌み嫌っているものな。使う者を弟子にすることはなく、悪用した者は拷問という噂だが……」

「それで死んだら、死体を異妖者に与えるらしい。サンタクロースのような容貌であられるのに怖いお方だ」

「それで、妖精王は？」

「御自ら上海へ行くか、それとも代理に向かわせるか検討中だそうさ」

「上海か……なら、ここより日本の方が近いのでは？ 日本には確かナンバー3がいらっしゃらなかったか？」

「どうだろう。あのお方は長期逗留を好まないから、もう離れられたかもしれないな。その前に、あのお方が妖精王のご命令を素直にきくと思うか？」

「……きかんだろうな。女王陛下のご命令ならともかく」

「ナンバー3は上海を避けているという噂も聞く。だとしたら、陛下は無理強いなさらないだろう。そうすると、妖精王が上海へ向かわれることになるのではないかな」

「案外、件の妖術師を捕まえて八つ裂きにと思つてらっしゃるかもしれんぞ」

「ありえそうさ。そんな妖精王と行動を共にする可能性があるとは……新米には骨が折れることだな」

「たまたま研修で上海にいただけだというのにな。かわいそうに」

「我々はこの結界を守り、奴の前途を祈つてやることしかできんがな」

「ああ、そうだな……」

声と車輪の音が濃霧に飲まれていく。代わりに夜に響くのは、悪意ある魔物の悲鳴のみ。

ここ、魔都・霊——倫敦に。



## 二、師匠ト弟子

「お断りします」

「即答か」

先尖りの六角柱が無数の放射線を描くロック・クリスタル。三メートルを超える水晶群の中央に、小柄な美少女の姿が投影されていた。鶯色の上品なベルベットのワンピースを纏い、王のようにゆったりと足を組み、ヴィクトリア調の椅子に背を預けている。素っ気ない言葉は、そこから届き、続く。

「当然ですわ。守衛のミスとはいえ、元々は貴方が張った結界を抜けられたのが決定的な痛手となったのですから。最後の砦に不備を作った貴方が責任を負うべきでは？ オベローン様」

愛らしい声の指摘に、クリスタルの前に立つ大柄な老人は口をへの字に曲げる。

「昂子、お前ね、僕の弟子だろう？ 師匠の言うことはきくもんじゃないか？」

「場所が問題ですの。上海へは行きません」

「理由もわかってるが、師匠が困ってるんだぞ？ 僕がいなくなった時を狙って、攻撃でも仕掛けられたらどうなる

と思う？」

「そうですね……では、こうしましょう」

美少女……昂子は、佳麗な顔に柔和な笑みを浮かべた。

「私が、貴方の代わりに倫敦を守りますわ」

「そうきたか」

「帝都へ戻り、節分と百鬼夜行を楽しもうと思ったのですけど……師匠の失態を補うのは弟子の務めですから。心置きなく上海へ向かってください。英国魔法結社創設者でありナンバー1である、オベローン・リアファール・ザナンお師匠様」

「お前は可愛いけど、可愛くないなあ」

「師匠が師匠ですから」

殊更、昂子は輝くような笑顔を見せた。

「しかたない。では、倫敦は任せたぞ」

「承知しました。心置きなく上海で搜索に励んでくださいませ。お師匠様」

クリスタルの中から昂子の姿が消える。真つ暗な空間にオベローンは一人きりになった。

「書斎」

一つ、革靴の踵を慣らすと、老人は瞬時に明るい場へと転移した。明るいといっても、先程いた真の暗闇からすれ



ばだ。タウンハウスの張り出し窓の向こうは晴れ……とは言い難い。どんよりと重い灰色の空が広がっている。暖炉でパチパチと鳴る火がなければ、本だらけの小さな部屋はもっと暗いだろう。

「はいよつと」

どうんつと重い音をたて、オベロンの足元に大きな物が落ちた。長期旅行用のトランクだ。音が重いのはたつぷりと荷物が入っているからである。

「危ないなあ、トリッシュ」

「だって、昂子にさっさと上海へ行けって言われたんだろ？ だったら、荷物いるじゃん」

細身の軀をメイド服に包んだストロベリーブロンドの少女はあつけられかんと口をきいた。

「まるで結果がわかっていたような口ぶりだな」

「そりゃそーさ。昂子が上海に行かないのは、瑛の為だろ？ だったら、倫敦を守るって言うのは当然じゃん。瑛は昂子から絶対離れないんだし」

「なんだろうな、瑛のあの忠犬ぶりは」

「しよーがないよ。自分を狗（いぬ）って思ってたんだから。出発は紅茶飲んでからにする？」

「もう行くでしょう。紅茶は船内（なか）でいただくよ」

「あいよ、マスター」

トリッシュはハンガーにかかっていた漆黒のインパネスを、背伸びしてオベロンに着せる。

準備が整い、扉を開けると、すぐ向かいに幅の狭い階段があった。その横の壁にある窓から倫敦の様子が見える。

灰色の空の下には、煉瓦色やベージュ色の三階建ての建物が道路に沿って所狭しと並んでいた。とろりとろりと流れ増える霧がそれを隠す。街を覆う濃霧に混じり、白濁りの人型がふわふわと漂い始めた。

魔都・靈——倫敦に、いつもの夜が訪れようとしている。狭い階段を下りるオベロンの後ろを、肩に軽々とトランクを担いだトリッシュが続く。

玄関前で、オベロンは靴の踵を一つ慣らした。

「ソールズベリー」

老人の声に応え、扉がふわつと開く。

その向こうには夜の近づく暗い空と風に揺れる草原がどこまでも広がっていた。

オベロンとトリッシュは、慣れた様子で扉を潜り、さくさくと草を踏む。



「女王陛下<sup>ヴィクトリア</sup>と警備の人達には上海へ行くって連絡しとい

たよ。昂子が来るまで頑張つて言つていた。陛下からお願ひしますって伝言。警備の人達からも。上海には研修中の新人がいるから使つてやってくれって。経験不足だけど、光属性で、いい腕してるんだって」

オベローンは、三つ編みを一つした立派な白髭を撫でて言う。

「その新人がどこまで役立つかわからんが、先に情報収集をしてもらうとするか」

「OK。移動中に上海支部と連絡が取れるように、セツティングしとくよ」

老人とメイドが向かう先に大きな影が横たわっていた。それは月と星の光を受け、きらきらと煌めく帆船だ。

長い船体に大きなマストが一つ。古代ローマのガレー船を想起させるそれは、水晶と銀で造られていた。草が波のように、船体を撫でている。

オベローンがそこに辿り着くと、透明に煌めく階段がキンカラコンと音をたて、甲板から足元へと伸びてきた。主に続き、メイドも上る。脹ら脛丈のスカートからちらちらとドロワーズのレースが覗く足が甲板につくと、階段はまたも音をたて収納された。

「それでは行くとするか。上海だ」

オベローンの声に従い、船体の左右から水晶のオールが何十本と現れた。それらが連なり、ゆうらりと波を描く様は、深海で泳ぐリュウグウノツカイのようだ。

二人を乗せた船はふわありと浮き上がり、ゆつたりと空を泳ぎだした。

船体の最後尾にある豪華なキャビンで、オベローンがトリッシュの淹れた紅茶を楽しんでいると、先程までいた倫敦のタウンハウス上空にさしかかった。

二人は揃って大きな張り出し窓の格子越しから下を見る。

分厚い雲の隙間から、点々と輝く無数の光が見えた。それらすべてがナナカマドの松明だ。地上で見ると点描の炎は、上空から見ると、ロンドン塔を中心に精緻で巨大な魔法陣を描いていた。

「二十四時間、あれを消さず守るのはさぞかし骨が折れるだろうな」

「警備の人達……えーっと……」

「英国女王騎士団」

「そーそー、英国女王騎士団の人達！ 自分達の失態だから責任を取るって言つて、不休で倫敦中見回ってるってさ」



「この儂が魔法をかけた薪をたつぷりと用意してやったんだ。それくらいは協力してもらわんな」

「そーい言い方するから、昴子に意地悪されるんだよ」  
メイドの毒舌に、老人は右眼モノクルをかけた顔をふいとそらし、長方形のショートブレッドをわざとさくさくと鳴らして食べた。

○ ○ ○

こぼり……こぼり……光届かぬ深海。

ずしりと圧のある真闇まやみの中、丸いティーポットのような、球体の海豚いかのようなものが橙色に仄かに光る。

それは無色透明の魔法硝子で造られた乗り物——海の泡号。

所有者は、鳶色トビイロの上品なベルベットのワンピースを纏い、王のようにゆったりと足を組み、ヴィクトリア調の椅子に背を預けている美少女……昴子だ。

目の高さに浮かぶ従属の魔法陣——呪痕じゅこんの中央に映る女性と、柔和に談笑をしている。

「ええ……ええ、そうですわね。私も倫敦で会えますのを楽しみにしています。それでは」

女性の姿が消えると、呪痕には海図と赤い進路線が映し出され、すうと胸の高さまで下がった。

昴子は、ふうと息をついて背もたれに頭を預ける。優雅な動きを追い、長いミルクティー色の巻き髪がふわりと揺れた。

若い東洋人の執事が差し出した堇すみれの砂糖菓子の一つ、口に運ぶ。

「いいのか、昴子。妖精王あいつを野放しにすると、どうなるかわからんぞ」

「かまいませんわ。あれでも腕は確かですから。今の、女王陛下クイーンや騎士団長との会話を聞いてましたでしょう？ 上海には新米ですけど腕の立つ騎士もいるとか。それに、上海あちらの私の館にはあの子を置いてあります。いざとなれば、あの子にも命じて……」

「その程度の戦力で、あいつの気まぐれが発生した時、止められると思うか？ 騎士は人間なんだろう？ それに上海にいるあいつは戦闘特化型じゃない」

「私は上海には行きません。絶対」

主である昴子の言葉に、瑛は長くまっすぐな黒髪の下にある端正な顔をむっと曲げた。



「俺のことなら気にしなくていい」

「私がいやなんです」

「強情だ」

「お前の主ですから」

昴子がずっと手を出す。瑛が淹れたての紅茶が注がれたカップとソーサーを置く。ジャージー牛のミルクと少しの砂糖が入ったそれを、昴子は一口喉に滑り落とす。西洋人形のような貌を、ほんの少し緩めた。

「確かに……師匠が気まぐれを起こした時のストッパーは必要ですわね。師匠にはあ言いましたけど、こちらでも手を打っておきましょうか」

「じゃあ、上海へ行くか？」

「私は師匠に代わり、倫敦を守らなくてはいけません。この機に乗じて、独逸の『猫と鴉』が奇襲をかけてくる……いえ、もう乗り込めるか試しているかもしれないし。ですから、帝都にいる適任者に相談してみますわ。慈螢様はお寺から離れられないでしょうから……あの方々がお暇だということですけど」

瑛は昴子のそばから離れると、テーブルの上の物を手に戻ってきた。梔の意匠が施された漆塗りの小箱だ。蓋を開け、昴子に向ける。中には名刺が入っていた。

幼い指が、雨と月が達者な筆致で描かれた一枚を取り出す。途端に瑛が不機嫌な顔になった。その様子を見た昴子は楽しそうに微笑する。

「お前、本当にあの方を目の敵にしていますのね」

昴子の椅子の足元にある、白くふかふかの小さな寢床から、くわあと愛らしい欠伸が聞こえた。シーズー犬がゆっくりと顔を上げる。やや大きめの体軀をのつたりと動かし寢床から出ると、磨き込まれた瑛の革靴をきゅつと踏んだ。まるで叱るように。

「わかってるよ。蜜柑姉貴。あいつと会っても良い子にしている。いやだけど」

瑛は難しい顔を元に戻し、白金色の犬を恭しく胸に抱き上げた。

昴子が呪痕の海図に指を滑らせる。赤い進路線がくにやりと動いた。

——『到着地変更終了 アラスカ ↓ 日本 帝都』

「お祖父様とは一週間後に帝都の館で待ち合わせをしてみましたけど、すれ違いになりそうですわね」  
「今は勅使河原とイースター島だったか？」



「ええ。勅使河原様がモアイをご覧になりたいからと。ふふ。お二人を見てますと、お祖父様がヴィクトリアのお父様と仲良くされていた頃を思い出しますわ」

懐かしさに綻ぶ昂子に、瑛は極々僅かな惻隱<sup>そくいん</sup>と労りを滲ませる。

「……そうか」

昂子の魔術に従属している海の精霊達が、海の泡号の進路をゆったりと変える。

真つ暗な深海に、呪痕の軌跡を浮かべては消しながら、海の泡号は進んだ。一路、日本——帝都へと。



三、光闇邂逅——魔都・怪 上海

細い。蜘蛛の糸を想起させる声が、塵の溢れる泥濘ぬかるみからする。

左右にせり上がる赤煉瓦の壁は、声の主にとって、高く、厚く。その絶壁の隙間で、ただ鳴いて待つしかできなかった。

——死を。

一月に入り、寒い日が続いていった。今もちらちらと白い雪が舞っている。美しく白い綿毛。しかし、声の主にとってはただ冷たい、死神の鎌だ。

みい、みい、みい……

母に置いていかれても、初めは希望が在った。いつか気づいて助けに来てくれるのではないかと。

自分はここにいと、喉が哽かれても鳴いた。

鳴いて、鳴いて、鳴いた果てに……それは訪れた。

虹彩も瞳孔も真つ黄色な目をキロキロと動かし、キイキイと鼠に似た声を上げ、ぴよんぴよんと飛び跳ね、近づいてくる。

——レンゲウエイ 魃鬼。

上海では掃いて捨てるほど存在する異妖者ことものだ。

好物は死体。

体長四インチほどの小鬼は、もうすぐ獲物になるものを見つけた歓喜ではしゃぐ。次から次へとやって来て、声の主の躰みの上で躍る。あつという間に小さな躰は青銅色の小鬼達に覆われてしまった。

狼狽で糸の声は益々細る。

歓喜で小鬼の声は益々大きくなる。

死ね、早く死ね。死して我らの血肉となれ。同胞はらからの苗床となれ。

そして、小鬼達の声は太い歌となる。糸の鳴き声を断ち切る為に。

「光あれ」

死を望む坩堝くわくの一つ、気骨ある涼やかな言葉が響いた。

言葉は光となり、絶壁の底から屋根まで届く。

まるで爆発する銀しろがね。

まともにそれを受けた魃鬼達は、口々に甲高い悲鳴を吐いて消滅していった。

そして、光が収まり、静寂が訪れる。

小鬼の太い歌も。糸の鳴き声も。消えた。



光を放った者は絶壁の奥へとロングブーツを進める。黒革の爪先に白い毛玉が転がっていた。黒の太い縁取りがされた白い袖が掬い上げる。

毛玉はふると震え、ゆらゆらと広がる。

それは痩せた白い子猫だった。

ふるふると瞼が震えると、色深い緑の瞳が現れた。

力なく鈍い翡翠に映るのは、青年と少年の境の人間。

刈り込まれた髪は暗闇の中で燃えさかる灼熱の炎の赤。

凜々しく太い眉の下で琥珀の瞳が勇敢に輝いている。

「かなり弱ってるな。すぐ楽にしてやる」

青年は子猫を両掌に包み込んだ。春の日だまりのような円やかな光が掌中に溢れる。少しすると、中でみいと声があった。相変わらず細い糸のようだが、先程よりは幾分か命の気配がする。

「よし。空腹を感じるようになったな。もう大丈夫だ」

青年はクラウンに薔薇の紋章が刺繍されたベレー帽を脱いで、子猫をすっぽりと入れた。

「もう少し我慢してくれ。支部に連れ帰ってやるからな」  
しかし、と青年は思う。

「研修に来てから、これで五匹目か……そろそろいい加減にしろと支部長に叱られるかもしれない」

青年が動物を助けるのはこれが初めてではない。母国である英国でもそうだった。そして、そんな青年を叱るのはたった一人だけだった。その者を思い出し、琥珀の瞳を切なく細めた。

軽くかぶりを振り、青年は薄暗く汚れた路地を出る。

背の高い赤煉瓦の建物が並ぶ隙間の石畳を踏み、うねうねとした道を進むと、るらりと二胡の楽音が聞こえてきた。音が大きく重なるにつれ、道幅は広くなり、明るい朱が増していく。

歩み出た大通りは、鮮やかな朱色の丸いランタンが無数に溢れかえっていた。

朱の光は西洋の建築技術で造られた赤煉瓦の建物をさらに赤く染める。幻想的な光の下、着飾った大勢の老若男女が笑顔で漫ろ歩いていた。

賑やかな光景が故郷の復活祭とかぶる……が、空気の冷たさで青年は現実に戻り、純白のインパネスの襟を掴む。

「これが上海のランタン祭か……大仰な準備をしているとは思ったが、ここまで盛大とは……これは支部に帰り着くのに骨が折れそうだ」

ふうと溜息をついて、母国語での独り言を続ける。



「裏通りでならず者を見つけては、『あれ』について聞いてみたが、収穫はなし……こちらに到着される前に、取り返しておきたかったが難しそうだな。騎士団長の株を上げられて一石二鳥と考えたのだが……」

昨日、立派な白髭を蓄えた老人から水晶越しに聞いた話を反芻する。

「しかし、不思議な話だ。『目を見るな』とは……」

手に持つベレー帽の中からみいという声が何度かした。「おっと、すまない。できるだけ早く支部に戻る。こないだ、子を産んだ母猫がいるから、乳をわけてもらえるよう、俺が頼んでみるからな。あいつは優しい猫だから大丈夫だと思う。無理なら山羊に頼むでしょう」

青年はベレー帽を優しく胸に寄せ、大通りを歩く。

二胡の演奏は、広場に集う楽団の手によるものだった。流麗な音が流れる中、人の流れに合わせて進む。

食べ物の屋台からは美味な香りが幾重にも漂い、年若い青年の腹を誘惑する。

それを振り切るのに成功した青年は、数多のランタンの下、市庁舎や大使館の建ち並ぶエリアへと進む。

芳しい香りが消えると、別の香りが混じった。独特の水の香り——海の香り。

大勢が集う雑踏の中にも、遠くから響く低音は青年の耳にも届いた。

青年のいるそこから少し離れて在る海。その奥からやって来る船の汽笛が。

○ ○ ○

黒に丸い蜂蜜色の灯りがふわりと一つ。

照らされた場所に広がる白布に、幾重にも皺が連なっている。

皺は不規則な軋みの音に合わせ、形を自在に変える。

ぐしやりと潰された。

潰したのは固く握り締められた白く嫋やかな手。

「んああつは、あつ、んつ、んあああ……!!」

ベッドの上で、シーツをくしゃくしゃに掴んだ女は珠沙華だった。

生まれたままの姿の珠沙華は、白いシーツの上に長い黒髪を乱し、甲高い声を上げ、蜂蜜色に染まった白い腹をうねらせた。

白く艶めかしい腹の下、大きく広げられた腿の間に黒い影があった。



それは、さわると柔らかそうなふわふわとした黒い巻き毛だ。もそりと動いて顔が上がった。

男らしい印象の唇からちろりと出ている舌は、自身の唾液と珠沙華の愛欲の雫に塗れていた。

床に膝をついた男——雨月は、長時間舐め続けている珠沙華の陰にまた舌を近づけ、べろりと舐めた。

「ひっ……あ、んああつ、あつ……んあつ……!!」

珠沙華の下腹が快楽に波打つ。

「どうして……? 今日……いつもより、愛撫がしつこい……はっ、あ、あつ、あああつ……!!」

「だってよお、これからのこと考えると、次、いつできるかわかんねえだろ? だからさ……な?」

雨月の舌がまた蠢く。

何度も何度も気をやって、すっかり固くなったままの珠沙華の肉蕾を素早くちろちろと舐め上げた。

「んううっ……! あ、あ、あつ、んっ、んあつ……!!」

珠沙華の、愛液を溢流させる秘穴を、敏感な蕾を、ぱっくりと開いた襞を、雨月は舌や唇で執拗に愛撫し続ける。

引っ切り無しに襲い来る膨大な快楽で小刻みに震える肉襞を、雨月は唇に挟み、強く引っ張った。

「んあつ、ううっ……!! あ、うああ、あつ……!!」

分厚い舌が、力強く秘穴を出入りする。

飛びかかってきた乱暴な快楽に、声を上げることができない珠沙華は、呼吸を止め、びくびくと足を揺らした。

珠沙華の腰の揺れに合わせるように、雨月は体液塗れの肉芽に軽く歯を立てる。

「んっ、んっ、んっ、んんんん……!!」

赤い唇が息を呑み、雨月の肩に脹ら脛を押しつけ、不規則に下腹を戦慄かせた。

小刻みな震えが、ゆっくりになって、止まった。その瞬間、珠沙華の躰はかくりと弛緩して、シーツの上にどざりと落ちる。

雨月は、べろりと唇を舐めるながら、のっそりとベッドに上がり、珠沙華の脚の間に腰掛けた。

「はっ、はあ……あつ……あ……」

気をやった余韻にぼんやりとしている珠沙華の腹に、雨月は掌を押しつける。

熱さに珠沙華がびくりと震える。染みこんでくる雨月の春情に自然と背筋が震えた。



大きな掌は慈しみに溢れている。それと同時に、まだ珠沙華を求めていた。だらしなく緩んでいた美しい貌が淫情に蕩ける。

「……見ては駄目……」

そう言えば、雨月は見る。珠沙華は知っている。だから、緩慢に膝を立てている脚を閉じようとはしない。

珠沙華が何を望んでいるか理解している雨月は、わざとそこに目を落とす。今までずっと口淫を続けていた珠沙華の淫裂へ。

長く美しい髪と同じ黒の薄い茂みは、とろとろの愛液と雨月の唾液でべとべとになっていた。楚々とした肉芽は欲情につんと勃っている。その下の襞の裂け目から、とろりと白く濁った体液が垂れ落ち、湿りきった陰毛の上を滑った。女の躰が本当にその気になっている証しの体液だ。今、珠沙華は雨月に何もされてはいないのに。

「ああっ、あっ……あああっ……！」

雨月の視線に歓喜した珠沙華は淫猥に喘ぐ。

続けて、白く濁った愛液をとろりとろりと垂れさせる。

雨月は楽しそうにそれを眺めていた目を、情人の貌に向けた。

「う、あっ……あああ……！」

目が合っただけで、珠沙華は肌を粟立たせ、白濁りの雫を鷄に垂らす。

珠沙華が次にどうして欲しいか、雨月には手に取るようにわかってはいたが、敢えてそれを避けた。焦らすだけ焦らしたら、珠沙華がどうなるか、様子を楽しんでいるかのように。

珠沙華のしっとりとした腹を撫でていた手を、すつと上へ滑らせる。先にあるのは、つんと尖った胸の先。

「あっ、んああっ……！」

太い指の腹で桜色の尖りを捉え、くにくにと掠るように愛撫する。

少ない刺激だというのに、過敏になっている珠沙華は、びくびくと腰を上下させた。腰が弓を描き、腹が窪む。陰襞の隙間から噴き出した愛液が、雨月の剛直に滴った。

「んんっ、あっ、ああっ……」

腹に力が入った為に噴き出した愛液の感触に、珠沙華は下腹を見た。

自身の陰の向こうにそそり勃つ雨月のものが見え、凝視して、唇を震わせる。

見続けていたのに、中断させられた。雨月の大きな掌が、珠沙華の両乳房を掴んだ為だ。

